慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代からルネサンスの宝石論とメディチ家の蒐集
Sub Title	Lapidaries from antiquity to the renaissance
Author	西川, しずか(Nishikawa, Shizuka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2017
Jtitle	哲學 No.139 (2017. 3) ,p.79- 118
JaLC DOI	
Abstract	This study aims to introduce gemmological writings known in the West from Antiquity to the Renaissance. From the Ancient period throughout the Renaissance, gemstones were considered to have medical, magical, and prophylactic properties. Information about gemstones can be gathered from encyclopaedias, lapidaries, medical, alchemical, and astrological works. The encyclopaedic traditions that can be referred to are, for example, Naturalis historia of Pliny the Elder, Etymologiae of Isidore of Seville, Physica of Hildegard of Bingen, and De mineralibus of Albertus Magnus. Lapidaries that contain information include Theophrastus' De lapidibus, pseudo-Aristotelian Lapidarium, Marbode of Rennes' De lapidibus, and Damigeron's De virtutibus lapidum and medical writings such as Dioscorides' De materia medica. In these works, the medical, magical, mystical, and prophylactic properties of gemstones are discussed, for example, smaragdus to cure a scorpion bite, calcedonius to win lawsuits, and so on. The primary sources in Arabic are Secretum secretorum and a book of magic, Picatrix. De quindecim stellis, quindecim lapidibus, and puindecim herbis et quindecim imaginibus attributed to Hermes Trismegistus and De veta libri tres of Marsilio Ficino, as well as De mineralibus of Albertus Magnus explain images engraved on stones which supposedly have celestial powers. Another source of information on gemstones is Bede's Explanatio Apocalypsis, which comments on gemstones listed in the Bible.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000139-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代からルネサンスの宝石論とメディチ家の蒐集

西　川　しずか*

Lapidaries from Antiquity to the Renaissance

Shizuka Nishikawa

This study aims to introduce gemmological writings known in the West from Antiquity to the Renaissance. From the Ancient period throughout the Renaissance, gemstones were considered to have medical, magical, and prophylactic properties. Information about gemstones can be gathered from encyclopaedias, lapidaries, medical, alchemical, and astrological works. The encyclopaedic traditions that can be referred to are, for example, *Naturalis historia* of Pliny the Elder, *Etymologiae* of Isidore of Seville, *Physica* of Hildegard of Bingen, and *De mineralibus* of Albertus Magnus. Lapidaries that contain information include Theophrastus' *De lapidibus*, pseudo-Aristotelian *Lapidarium*, Marbode of Rennes' *De lapidibus,* and Damigeron's *De virtutibus lapidum* and medical writings such as Dioscorides' *De materia medica*. In these works, the medical, magical, mystical, and prophylactic properties of gemstones are discussed, for example, *smaragdus* to cure a scorpion bite, *calcedonius* to win lawsuits, and so on. The primary sources in Arabic are *Secretum secretorum* and a book of magic, *Picatrix*. *De quindecim stellis, quindecim lapidibus,* and *puindecim herbis et quindecim imaginibus* attributed to Hermes Trismegistus and *De veta libri tres* of Marsilio Ficino, as well as *De mineralibus* of Albertus Magnus explain images engraved on stones which supposedly have celestial powers. Another source of information on gemstones is Bede's *Explanatio Apocalypsis*, which comments on gemstones listed in the Bible.

* 慶應義塾大学文学研究科後期博士課程修了

はじめに

フィレンツェの実質的な統治者であり，ルネサンスの栄華をきわめたと言われる，ロレンツォ・デ・メディチの名は誰もが知っていよう．ロレンツォは美術の庇護者としても知られるが，意外にも，彼の財産目録においてより高く値踏みされていたのは，絵画でも，彫刻でもなく，むしろカメオをはじめとする彫玉である．彫玉とは，神話の一場面や様々なモチーフが刻まれた宝石のことで，浮彫の施されたカメオ以外に，沈み彫りの施されたインタリオがある．エルンスト・ゴンブリッチが「彼［ロレンツォ］が芸術に費やすべきであった資金は，高価な古代の宝石の購入にあてられたのではないかとさえ疑いたくなる[1)]」と述べるほど，ロレンツォはこの彫玉などの古代の宝石の蒐集に熱を上げていた．

このメディチ家の蒐集に関する従来の研究では，蒐集品の特定と同時代の美術作品の受容に関するものが多い．一方で，古代の宝石や彫玉が何故それほどにまで高い価値があると認められ，知識人たちが執拗に蒐集するに至ったのかについて，当時知られていた宝石や彫玉に言及する著作の精査をとおして，宝石や彫玉が持つとされていた超自然的な力の希求という観点からメディチ家の蒐集を論じた研究は皆無に等しい．当時の人々は，現代の私たちとは全く異なる視点で宝飾品を捉えており，多くの著作に言及されているように，ひとびとは古代より宝石のもつ魔術的で神秘的な力を信じ，単なる装飾品としてではなく，薬や護符として扱っていたのである．したがって，この点を考慮して蒐集の意義を考察することは有益であると思われる．

このような宝石に対する当時の人々の認識を示す，ロレンツォの宝飾品にまつわる大変興味深いエピソードが二つ伝えられている．ひとつは，1478 年から 1526 年までのフィレンツェおよびイタリアのさまざまな出来事を記した，銅細工師バルトロメオ・マージの『回想録』に言及されるものである．バルトロメオ・マージは 1480 年生まれではあるが，父が

営んでいた工房の記録などを用いて執筆された『回想録』は，当時のフィレンツェの様子を伝える重要な史料とされている．この中でマージは，1492年にフィレンツェを襲った嵐の際に，ロレンツォが指輪から精霊を解放し，それによって嵐を鎮めたという，以下のような噂を記している．

> 私はこのように記憶している．一四九二年四月五日の夜三時ころ，風雨を伴う悪天候になり，雷が同時に六つ落ちた．落雷があったのはサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドームのランタン（頂塔）だと言われ，大聖堂の内と外の多くの大理石を破壊した．……伝えられるところによると，悪天候が訪れた時，ロレンツォ・デ・メディチは，ある精霊を自由にして解放した．その精霊は，ある指輪のなかに捕らえられていたと言われている．精霊を自由にして解放した，まさにその時に幸運が訪れた．この精霊は何年間も，先の指輪の中に捕らえられていたという．この悪天候の時に，ロレンツォは重い病の床にあったため，精霊を解き放ったのだと言われている[2)]．

シェイクスピアの『テンペスト』さながらのこのエピソードによれば，指輪の中に捕らえられていた精霊の解放によって嵐は静まったものの，ロレンツォの病状は悪化したという．実際，この指輪の精霊の解放のわずか三日後，ロレンツォはこの世を去ってしまう．マージの記述は歴史的事実とは捉えられないだろう．それでもなお，このような記述が残っていることこそ，当時宝飾品に与えられていた価値が単なる財産としてのものだけでなかったことを端的に示している．

ロレンツォの死に関して，人文主義者アンジェロ・ポリツィアーノの書簡に，もうひとつ宝飾品にまつわるエピソードが語られている．すなわち，死を間近に迎えた病床のロレンツォに，真珠と高価な宝石の粉末が処方されたのだという．

それからやがて明らかになるように，大変熟練した医師のラッザーロがティチーノから到着した．彼が呼びだされたのは遅すぎたが，試していないことがないようにするために，ラッザーロは，真珠とありとあらゆる種類の宝石を粉砕してつくる大変高価な治療薬を試みた[3]．

なんとも迷信的に思われるこれらの記述は，しかし，宝飾品や宝石に対する当時の認識を良く表わしている．当然のことながら現代の私たちは，指輪の精霊を解放せずとも時がたてば嵐は去り，長らく患っていたロレンツォの痛風はどのみち悪化せざるをえなかったということ，そして宝石の粉末はロレンツォの病状を悪化させることはあっても，改善することはなかったはずであることを知っている．しかしながら，当時の人々は，私たちとは全く異なる視点で宝飾品を捉えていた．後述するように，ルネサンス当時の常識においても，宝石の薬効や指輪の精霊には信じるに足りる根拠があった．

宝飾品の歴史は今日ではおもに工芸史や美術史，もしくはコレクションの歴史や経済史の文脈で語られるであろう．しかし宝飾品には，現代ではほぼ忘れられたもうひとつの側面，護符や薬としての側面があったのである．ロレンツォが処方された高価な宝石とはなんであったのか．また，彼が解き放ったとされる指輪の精霊とはいったいなんであったか．ここではこの二つエピソードを出発点に，ロレンツォ・デ・メディチにまつわる宝飾品を具体例として取り上げ，当時信じられていた宝飾品の神秘的・魔術的な力について考察したい．

1. ルネサンスにおける彫玉蒐集

宝飾品の神秘の力や魔術的な力について考察する前に，ロレンツォ・デ・メディチがとりわけ情熱を傾けていた古代彫玉の蒐集の当時の状況について概観しよう[4]．

古代ギリシアおよび古代ローマ時代に制作された彫玉，すなわち像の刻まれた宝石は，十五世紀のイタリアにおいて，とりわけ知識人たちに好まれた蒐集品であった．ロレンツォ・デ・メディチに先行する著名な蒐集家としては，教皇パウルス二世（ピエトロ・バルボ，在位1464–1471）を筆頭に挙げることができる．パウルス二世の財産目録には，800点以上の彫玉が記載されており，教皇のこの彫玉に対する執着を窺い知ることができるエピソードがいくつも知られている．例えば，トゥールーズの修道院に保管されていた古代ローマ時代の《アウグストゥスのカメオ》（ウィーン美術史美術館）を手に入れる代わりにガロンヌ川に架ける橋の建設費用を負担し，また，ロドヴィコ・トレヴィサン枢機卿（1401–1465年）の相続に介入してまで同枢機卿の彫玉コレクションを手に入れている．さらには，自身の彫玉のブロンズ製複製を制作させてもいる[5)]．

同じく著名な彫玉蒐集家であったのは，フランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿（1444–1483）であるが，同枢機卿の財産目録には200点以上の彫玉が記載されている．そのうち最も有名なのは，現在オックスフォードのアシュモレアン美術館に所蔵される古代ローマ時代に制作された《フェリックス・ジェム》であるが，これは教皇パウルス二世が所蔵していたものである[6)]．ゴンザーガ枢機卿が1483年に没したさいには，借金の抵当として枢機卿の彫玉が保管されていたメディチ銀行のローマ支店にロレンツォ・デ・メディチをはじめ，マントヴァ侯フェデリーコ一世・ゴンザーガ，カラブリア公アルフォンソ，ハンガリー王マチャーシュ一世らが，枢機卿の彫玉を手に入れるために，借金の肩代わりを申し出たという[7)]．これは当時の彫玉に対する大変な熱狂が窺えるエピソードであろう．ロレンツォ・デ・メディチの彫玉蒐集は，このパウルス二世やフランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿の影響を受けていると考えられている．

ロレンツォ・デ・メディチもまたパウルス二世やゴンザーガ枢機卿にも勝るとも劣らぬ彫玉蒐集家であった．ロレンツォはありとあらゆる手段を

使って彫玉を蒐集したことが知られ，教皇パウルス二世の借金のかたに，教皇の蒐集の多くを手に入れている．1492年のロレンツォの財産目録には，多数の宝飾品が記載されているが，中でも古代に制作された彫玉が圧倒的に多い点が際立っている．ロレンツォの財産目録において中核をなすのは，彫玉や貴石製器杯などの古代に制作された工芸品であり，総額の約七割を占めている[8)]．メディチ家の彫玉蒐集は，ロレンツォ・デ・メディチの祖父コジモの時代に始まったと言われるが，父ピエロが所有したおよそ30の彫玉を少なくとも倍以上にし，イタリアで最大ではないにしても最も有名な彫玉コレクションのひとつにしたのはロレンツォであった．ロレンツォの彫玉の多くは，教皇パウルス二世の蒐集に由来しており[9)]，なかでも後にファルネーゼ家の所有になることから現代では《ファルネーゼの皿》（ナポリ国立考古学博物館）と呼びならわされている，ヘレニズム時代の両面カメオ彫りの深皿は，ロレンツォの財産目録において一万フィオリーニという最も高額な評価が与えられている[10)]．その一方で，フィレンツェの巨匠ドナテッロの大理石浮彫《昇天と聖ペトロに鍵を渡すキリスト》（ロンドン，ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）は，同財産目録において十五フィオリーニの価値しか与えられていない[11)]．また，また，ロレンツォの注文ではないものの，ボッティチェッリの《サン・マルコの祭壇画》（フィレンツェ，ウフィツィ美術館）には百フィオリーニしか支払われていない[12)]．これらのことからも明らかなとおり，当時彫玉が最も高い評価がなされた美術品であった．冒頭のゴンブリッチの言葉どおり，ロレンツォが同時代の主要な美術作品のパトロネージよりも古代彫玉の蒐集に熱心であったことは明らかである．さらに，これらの彫玉の多くに，自身のイニシャル「LAV.R.MED.」を刻ませていることから，彫玉の所有者であったことを後世にまで知らしめたいという，ロレンツォの彫玉に対する思いが窺える．実際に，このイニシャルの存在によって，ロレンツォが所有した彫玉を同定することが可能となった．

ロレンツォ，そして当時の知識人が，これほどまで熱心に彫玉を蒐集した理由には，もちろん古代への憧憬があり，また資産的価値そのものの魅力に加えて，社会的地位の誇示を意図したものであったことは事実であろう．一方で，次に詳細に述べるように，古代より多くの著作に，宝石や彫玉に薬効や神秘の力が宿ると言及されていることが，蒐集の動機として大きな影響を及ぼしていたことも否定できないであろう．宝石や彫玉の蒐集とは単に物質としての所有を意味しただけでなく，未知なる力の所有でもあったのだ．

2.　宝石に関する古代・中世の書物

支配層を含め広く社会的に普及していた宝石は，古代以来の学問体系において特別な力を持つとみなされ，医学や占星術，そして魔術とも密接に関連づけられていた．いうまでもなく，近代以前には，これらの学問にはいまだ明確な区分がなされていなかった．中世やルネサンスの医学は，占星術的な知識を大前提として活用し，医学的処方は通常そうした占星術的理論に基づいてなされていた．占星術と医学には切っても切れない関係があったように，病気を治すための魔術も存在するなど，医学と魔術の境目も曖昧であった[13]．こうした曖昧さを端的に表わしている，マーゾ・フィニグェッラの《図解年代記》の一枚「医師アポロン」では，魔法円陣の中に立つ医師アポロンが，何やら液体の入った器と本を手に，病床の若い男の病を治すために，悪魔を呼び出している．そして，このような，魔術と医学，そしてさらに占星術までもが一体となった領域において，古代の権威を典拠として，宝石の持つ薬効や神秘の力が信じられていた．

宝石に関する古代から中世の書物は膨大にあり，百科事典，医学書，錬金術書，占星術書，そして宝石誌に言及される[14]．すべてを詳細に論ずることはできないが，ここではその一覧を挙げてみたい．

宝石が百科事典の一項目として記載されるのは，古代ローマの博物学者

プリニウスの『博物誌』[15]，それを抜粋した三世紀ころの文法家ソリヌスの『奇異事物集成』[16] や中世初期の神学者セビリャのイシドールスの『語源論』[17]，十一世紀から十二世紀のフランスのベネディクト会士サントメールのランベールの『花々の書』[18]，十二世紀ドイツのベネディクト会系女子修道院長ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの『自然学』[19]，十三世紀のイギリスの神学者ネッカムの『事物の本性について』[20]，十三世紀の神学者バルトロメウス・アングリクスの『事物の諸性質について』[21]，ザクセンのアルノルトの『自然の限界について』[22]，十三世紀のドミニコ派の修道士ヴァンサン・ド・ボーヴェの三部からなる『大いなる鏡』のひとつ『自然の鏡』[23]，十三世紀の神学者トマ・ド・カンタンプレの『事物の本性について』[24] そして，同じく十三世紀の神学者アルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』[25]（図 1）であるが，もとをたどると，アリストテレスの『天体論』や『宇宙論』の他，テオプラストスの『石について』[26] に依拠すると考えられている [27]．

これらの著作では，さまざまな宝石が列挙され，色や硬さ，産地などとともに，宝石が持つ効力，例えば，テオプラストスの『石について』に認められるように，エメラルドは水をこの宝石の色と同じ緑色にする力があり，エメラルドの印章には視力を回復する力があるといった記述がされている [28]．このテオプラストスの言及に明らかなとおり，宝石には薬効があると信じられ，医学書にも宝石の効能が記載された．古代ギリシアの医者ペダニウス・ディオスコリデスの『薬物誌』の第五巻には「鉱石類」という項目が設けられ，サファイアを服用するとサソリに刺された傷に効く，などといった宝石の薬効が詳述される [29]．その他の重要な著作には，偽アリストテレスの『石について』[30] や，紀元前一世紀の魔術師とも言われるダミゲロンの『石の効力』[31] が挙げられる．

また，ラテン語訳がヨーロッパ世界に知られていたアラビア語の著作には，十世紀から十一世紀のイスラム世界を代表する医師であり哲学者イブ

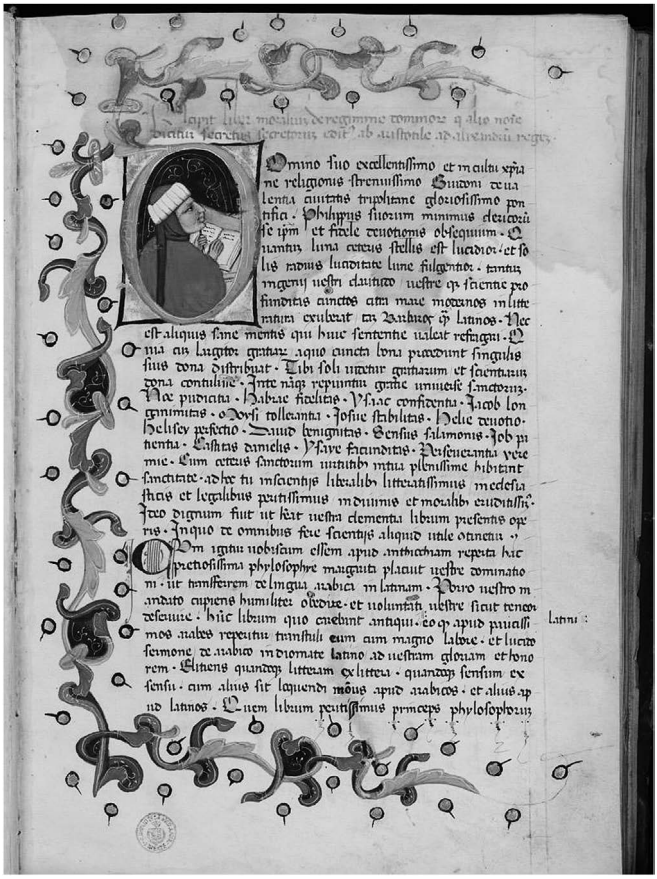

図1　アルベルトゥス・マグヌス　『鉱物論』　1401–1410年頃　フィレンツェ　ラウレンツィアーナ図書館

ン・スィーナー（ラテン語名アヴィケンナ）の主著『治癒の書』の一部である『鉱物論』[32] や，十三世紀のイギリスの哲学者ロジャー・ベーコンが編集したことが知られる[33]，九世紀ごろに成立したとされる『秘中の秘』（図2）と呼ばれる書の他，十一世紀のチュニジアで生まれイタリアで活動した医師コンスタンティヌス・アフリカヌスの医学書である．また，錬

金術書，医学書，占星術書を著した八世紀ころの哲学者ジャービル・イブン＝ハイヤーン（ラテン語名ゲベルス又はゲーベル）や九世紀の天文学者であり数学者のサービト・イブン・クッラ（ラテン語名テービト），九世紀の医師クスタ・イブン・ルカなどの著作の他，十三世紀よりラテン語版が広く知られていたアラビア語の魔術書『ピカトリクス』[34] にも宝石の特

図２『秘中の秘』 14 世紀　フィレンツェ　ラウレンツィアーナ図書館

別な力について記載されている．

その他，中世やルネサンスにはモーセより少し後の賢者だと信じられていた，ヘルメス・トリスメギストス（三倍偉大なるヘルメス）の著作[35]，すなわち，紀元前三世紀から紀元後三世紀に多数出現したヘルメス・トリスメギストスの名を冠した一群の著作の中の『アスクレピオス』[36]や『十五の恒星，十五の宝石，十五の薬草と十五の像』[37]に加えて，は，中世を通じて広範に流布していた十一世紀のフランスの司教マルボドゥスの詩『石について』[38]にも宝石の神秘の力が説かれている．

また，宝石は『旧約聖書』「出エジプト記」（28章17–20節，39章10–13節），「エゼキエル書」（28章13節），『新約聖書』「ヨハネの黙示録」（21章19–20節）といった聖書にも言及されるものである．当然のことながら，聖書には宝石の薬効や効能は記述されていないが，「出エジプト記」では十二種類の宝石が司祭の胸当てを飾り，「ヨハネの黙示録」では十二種類の宝石は天上のエルサレムを飾っている．また，七世紀から八世紀のイングランドの聖職者ベーダ・ヴェネラビリスの『黙示録注解』では，碧玉は信仰を表わすといったように宝石は象徴的に解釈されている[39]．

このように，宝石の薬効や効能，神秘の力について記した著作は古代から中世をとおして膨大にあり，これらの著作の多くが，医師や哲学者，神学者や修道士といった権威ある人物よって著されている点は特筆に値する．宝石の未知なる力は，古代以来の長い自然哲学や博物学，鉱物学などの伝統において権威を持って認められてきた既成の「事実」であった．そして，次章で述べるとおり，これらの著作はメディチ家周辺でも知られていたことから，宝石には財産や蒐集品としての意義に加えて，薬効や神秘の力という価値が認められていた可能性は高い．

3.　メディチ家周辺で知られていた宝石に関する書物

上述の著作の中で，メディチ家周辺で知られていた，したがってロレン

ツォとその周辺の宝石観に直接の影響を与えた可能性の高い書物にはどのようなものがあるのだろうか．聖書の言及は当然知られていたものとして，ここでは，メディチ家の財産目録やメディチ家周辺の人文主義者ピコ・デッラ・ミランドラの蔵書，そしてマルシリオ・フィチーノの著作『三重の生について』に記述されるものに加えて，レオン・バッティスタ・アルベルティやフィラレーテの著作を見てみよう．

プリニウスの著作『博物誌』では，その三七章が宝石にあてられ，ローマ皇帝らが宝石を蒐集したことや，宝石の薬効と魔術的な力についても述べられている[40]．フィレンツェのラウレンツィアーナ図書館に所蔵される『博物誌』（図3）は，ロレンツォの父ピエロが所有していたものである[41]．

また，フィチーノは，ロレンツォに献呈した著作『三重の生について』（図4）のなかで，古代の著述家の言及として，宝石の薬効や魔術的な力について詳述している[42]．古代の著述家の中でも，ヘルメス・トリスメギストスの著作に認められる言及は，当時たいへんな権威を持って受け入れられていた．フィチーノはこれら一群のいわゆる「ヘルメス文書」をロレンツォの祖父コジモの命によって翻訳している[43]．

ヘルメスの著作には，宝石の驚くべき力が明かされる．例えば，『十五の恒星，十五の宝石，十五の薬草と十五の像』には，その名のとおり星辰の力を得るために用いる薬草と宝石，そして宝石に刻むべき十五種類の像が列挙されている[44]．また，『アスクレピオス』によれば，宝石には神性が宿り，薬草や香辛料とともに用いれば，人間は神々を創造することができるのだという[45]．十五世紀にフィレンツェで活動した金細工師マーゾ・フィニグェッラによる『図解年代記』の一枚〈ヘルメス・トリスメギストス〉には，豪奢な衣装を身に纏い王冠をいただいた賢者ヘルメスが，今まさにこの神像を造り出した場面が表わされている（図5）[46]．古代の偉大な賢者と信じられていたヘルメスの言及が，メディチ家周辺で信じられていたことは疑いないと思われる．

図3　プリニウス　『博物誌』　1458年　フィレンツェ　ラウレンツィアーナ図書館

また，メディチ家周辺の人文主義者ピコ・デッラ・ミランドラの蔵書には，宝石の特別な力について言及する著作が多数含まれていた[47]．たとえば，アルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』では，彫玉の魔術性について論じられており，アリストテレスがアレクサンドロス大王に政治，道徳，健康について忠告するという形式をとる『秘中の秘』や，ラテン語版

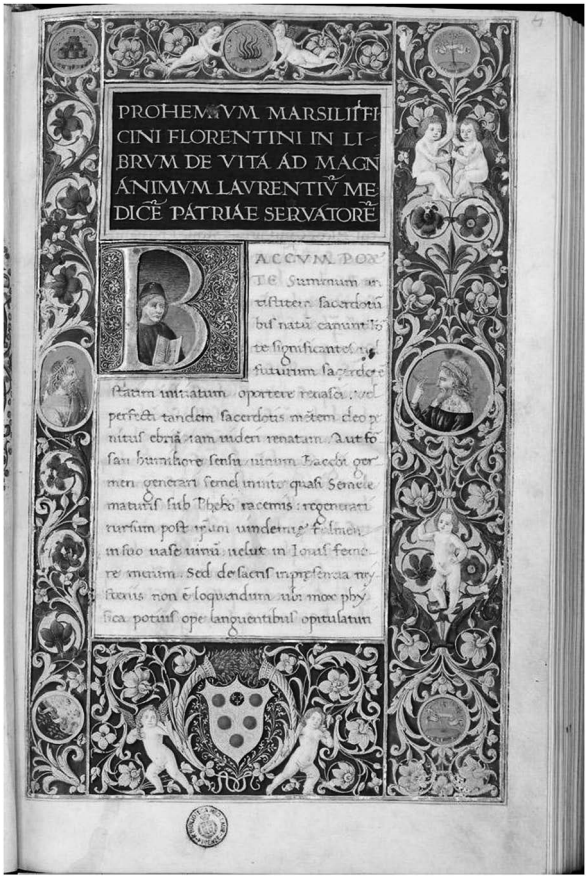

図4　マルシーリオ・フィチーノ　『三重の生について』 15世紀　フィレンツェ　ラウレンツィアーナ図書館

が知られていたアラビア語の魔術書『ピカトリクス』には，宝石や印章指輪の護符としての使用や，それらを用いて精霊を呼び出すという，召喚魔術とも言える記述が認められる[48]．また，セビリャのイシドールスの『語源論』では，あくまで迷信を紹介するという形でありイシドールス自身は否定的ではあるものの，碧玉には幸運をもたらす力があるなどといった言

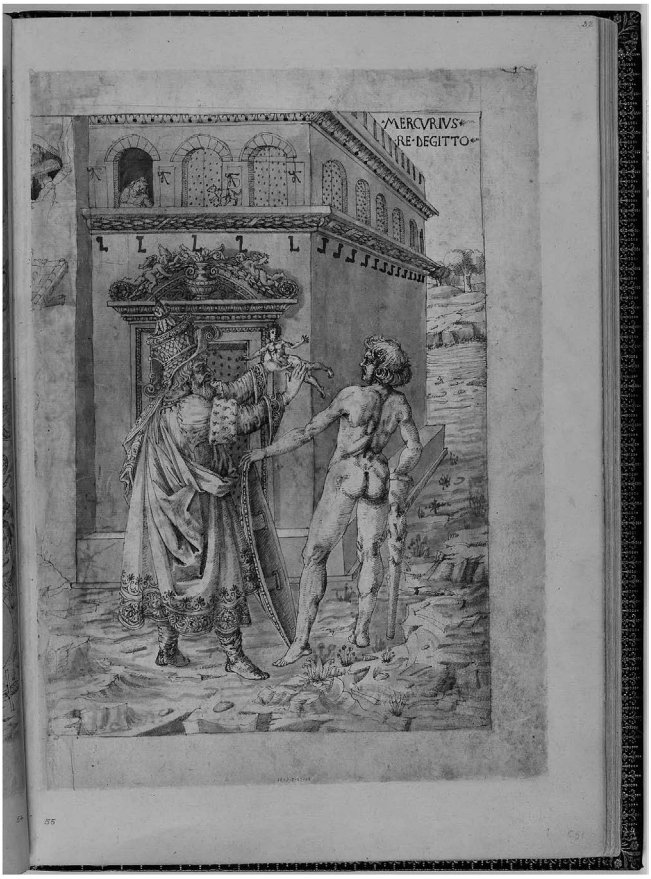

図5「ヘルメス・トリスメギストス」 マーゾ・フィニグェッラ 『図解年代記』
1470-1475年頃　ロンドン　大英博物館

及がなされている[49].

また，1499-1500年頃に編纂されたフィレンツェのサン・マルコ図書館の目録には，ロレンツォの祖父コジモ・デ・メディチや人文主義者ニッコロ・ニッコリの蔵書に由来するものが多数含まれているが，この目録にはベーダ・ヴェネラビリスの『黙示録注解』が記載されている[50].

その他メディチ家周辺で知られていたと思われるものには，中世より広範に流布していた宝石の神秘の力について説くマルボドゥスの詩作『石について』や，十二個の印章指輪の神秘の力が明らかにされるという寓話であるレオン・バッティスタ・アルベルティの『指輪』[51] がある．また，ロレンツォの父ピエロ・デ・メディチに献呈されたフィラレーテの『建築論』にも宝石には何らかの力があるものとして言及されている [52]．

これらの著作は，先述の名高い彫玉蒐集家で知られたフランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿も所有していた．ゴンザーガ枢機卿の蔵書には，プリニウスの『博物誌』やアルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』の他，ディオスコリデスの『薬物誌』からの抜粋『鉱石類』，星辰像を用いた護符の制作方法が言及されるサービト・イブン・クッラの『像について』が含まれていた [53]．ロレンツォ・デ・メディチは 1483 年にゴンザーガ枢機卿を訪ねてマントヴァに滞在するなど枢機卿と親交があり [54]，供に著名な彫玉蒐集家という共通点に，宝石に関するこれらの著作について意見を交わした可能性は高いだろう．

4. 宝石の薬効

それでは，宝石に関する著作には具体的にどのような言及がされているのだろうか．まずは，マルボドゥスの詩『石について』を見てみよう．宝石の医薬的および神秘的な効能を説くこの詩の序文は，以下のように締めくくられている．

> われわれは確かに，石のかくれた力を知ることを望んでいる．
> その仕組みはわからないが，それは明らかに効能を発揮する．
> われわれは，真の，そして稀なる栄光が現われるよう願っている．
> すなわち，ここで喜ばれるのは，医師の熟練した治療であり，
> 彼らは石の助けを借りて病を追い払うと言われている．

石のおかげで，ありとあらゆる幸福が必ずもたらされると
著述家たちは述べる．このことは彼らの手によって検証されたという．
固有の神性が宝石に備えられているかどうかなどと，
何人たりとも疑惑や疑念を持ってはならない．
植物に与えられた力は大きいが，宝石に与えられた力は何にも増して大きい[55]

宝石の特別な力に対するマルボドゥスの確信は，現代の私たちからすると驚くべきものである．もっとも，パワーストーンなどの現代のサブカルチャーにおける宝石観を想起するなら，現代の私たちにすら実は部分的に受け継がれているものといえるだろう．宝石の色彩や輝き，硬度や永続性，その他化学的物理的特性は，今なお私たちを魅了するが，それは単に美的鑑賞だけに由来するものではなく，ある種の神秘性への崇敬の念を含んでいるように思われる．

この記述のあとでマルボドゥスは，宝石の個別の力に言及する．例えば，アダマス（金剛石・ダイヤモンド）は「魔法の術のために，この石は役立つとされている．それは不思議な力で，それを持つ人を無敵にし，夜の亡霊も空虚な幻影も追い払ってくれる（四三〜四五連）」という．

さらには，持病の痛風に悩んでいたロレンツォにうってつけの宝石も言及される．それは，カスピ海南部にあった古王国メディアで産出するメドゥスという宝石である．マルボドゥスによれば，その宝石を「乳鉢の中で，一度だけ男児を産んだことのある婦人の乳（五〇七連）」，もしくは「一度だけオスを産んだ羊の乳（五一一連）」で溶かすと，「長患いの足痛風を癒す（五一三連）」という[56]．このまことしやかな効能は，実際に病気治癒のために服用することが意図されていたと思われる．

そしてこのような考えは，なにもマルボドゥスに限ったことではなかった．このメディアで産出される宝石が，慢性の痛風に効能があるという同様の言及は，アルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』にも認められ

る[57]．これらの記述は，冒頭に引用したポリツィアーノが言及する，病床のロレンツォに処方された宝石のひとつが，このメドゥスであったことを示唆しているのかもしれない．先に述べたとおり，アルベルトゥスの宝石に関する著作は，ピコ・デッラ・ミランドラの蔵書に含まれており，ロレンツォに宝石が処方されたさいに，このアルベルトゥスの言及が考慮されていたとも考えられるであろう．

また，医師でもあったフィチーノは『三重の生について』の第一巻の二三章において，十一世紀のシリア人医師小メスエの引用として，まさに，ロレンツォに処方されたとポリツィアーノが伝えるような，真珠や宝石の入った嘗め薬の作り方を記している．それは大まかに以下のようなものである．果物の搾り汁とバラ水を赤い絹とともに煮て，液体が赤くなったら絹を取り出し，砂糖を入れて煮詰める．火からを下ろし，砕いた琥珀を入れ琥珀を溶かす．そこに粉状にしたアロエの木とシナモン，ラピス・ラズリ，真珠，黄金，ムスクを入れると出来上がる．これを朝晩，ワインとともに服用するとよい，という．効用についての言及はないが，フィチーノはこの嘗め薬が一番気に入っていたそうで[58]，ロレンツォが処方された薬も，これに近いものだったと思われる．

ロレンツォの歿後に編纂された1492年の財産目録には，真珠は多数記載があるものの，痛風に効能があるとされる，メドゥスと特定できる宝石はない．このような宝石は医師が薬として処方するものであって，個人が所有し財産目録に記載されるようなものではなかったのかもしれない．とはいえ，ロレンツォは，病床において医師の処方した真珠や宝石を服用するぐらいであるから，その力を信じていたはずである．

5.　彫玉の超自然的な力

宝石に薬効や効能があるとされていたのなら，ロレンツォ，そして当時の知識人が熱心に蒐集した彫玉はどうだったのだろうか．彫玉，すなわち

像が刻まれた宝石には，さらなる神秘の力が宿ると信じられていたことを，多くの著作が伝えている．そして，この彫玉の力は，像の力をとおして奇跡を起こすという，像の使用もしくは，いわゆる像魔術と関連していたのである．

まずは，アルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』を見てみよう．既に述べたとおり，メディチ派の人文主義者ピコ・デッラ・ミランドラが所有していたこの著作において，アルベルトゥスは，彫玉とその効能についての章を設け，その冒頭で魔術に属するものであると明言している．

> 石の像と印像について語ろう．これは，占星術に依拠する降霊述の一部をなすものであり，像や印像の降霊術と呼ばれる．それは良き教養であって，われわれからそれを学ぼうとしたのは，われらが修道会の会士たちであった．……石の印像については，古代の書物を知るものはわずかで，また，占星術，魔術や降霊術について知らなければ，印像についてもほとんど理解できない．……そして第三に技芸によって作られた像について語り，印像の力について説明しよう[59]．

このように，彫玉は魔術の一部をなすものとみなされていた．ここで言及される石の像と印像とは，ワイコフによると，浮彫りのカメオと沈み彫りのインタリオを含んでおり，ここであえて，「印像」（sigillum）と訳した語は，本来印章を意味する[60]．アルベルトゥス・マグヌスは，石に像が彫り刻まれるときに，星の力が石に注ぎ込まれ，その像を通して奇跡を起こすと考え，以下のように述べている．

> 自然物であれ人工物であれ，すべてのものは第一に天の力によって突き動かされる．……もし星の霊感が，工匠に技芸を与えるという形で影響を与えると，その技巧によってつくられたすべての作品に，何らかのその力が流入す

> ることを妨げることはできない．……自然学の一流の師匠や教師は，星々の像を宝石や金属に彫刻することは，天の力の多くがその中で結合する瞬間を，それらが最も強力に作用すると考えられる時を見計らって行われるべきだと主張している．天の力は，そのような像を通して奇跡を起こす[61]．

すなわち，ある特定の星の配置をなす時刻を選んで，宝石に像を彫り刻むという行為により，宝石に本来天体が持つ神秘的な力が注ぎ込まれるというのである．同様の言及は，フィチーノの『三重の生について』にも認められる．

> 像が刻まれる際に，星の光が金属や宝石をすばやく透過し，すばらしい恩寵，もしくは，少なくとも何らかの恩寵の類を刻印する，ということを簡単に否定することはできない[62]

この言及はフィチーノも，像が刻まれた宝石である彫玉に，特別な力が宿っていると信じていたことを示している．フィチーノによると，金属や宝石はその硬さゆえに，一度星辰の力が注ぎ込まれると，例えば木などのような硬度が低いものよりも，その力が長く保たれるため，像を刻む支持体として適しているという．また，その硬さのために金属と宝石は，地中に埋まっていた時に保持していた万物の恩寵を，いつまでも維持するのだという[63]．したがって，像が刻まれた宝石である彫玉は，最も強い力を持つアイテムのひとつであった．このことから，彫玉蒐集の動機のひとつが，この未知なる力への希求であった可能性は少なくない．アルベルトゥス・マグヌスやフィチーノの著作を読むことが可能であった，ロレンツォをはじめとした当時の知識人の間で，彫玉蒐集がもっとも盛んだったことは，このことを裏付けているといえるであろう．さらに特筆すべきは，この像を通して星辰の力を手に入れるためにフィチーノ自身が，天然磁石に

熊座の像を刻んだことがある，と告白している点である[64]．

その一方で，刻まれた像に力が宿るという考えは，石の力や像の力を用いて，一種の護符をつくりだすことを意味するが，それは偶像崇拝の疑いをかけられかねない危険なものでもあった．たとえば，先に引用した，彫玉に関する章の冒頭でアルベルトゥス・マグヌスは，「像や印像の降霊術と呼ばれる．それは良き教養であって，われわれからそれを学ぼうとしたのは，われらが修道会の会士たちであった」と言及し，ここにワイコフは，キリスト教の教えに反しない害のないものであると印象付けようとするアルベルトゥス・マグヌスの苦心が見て取れる，と指摘している[65]．

十五世紀当時においても，これがいかに危険であったかは，フィチーノが後に『三重の生について』の『弁明』を執筆せざるを得なくなっていることが，端的に示している．一四八九年九月に書かれた『弁明』は「三人のピエロ」に向けられており，そのうちの一人はピエロ・ソデリーニだとされているが，フィチーノはその中で「キリスト教徒に魔術や像の使用がどのような意味があるのか，と問う人もいるかもしれない」と述べられていることから，像の使用が問題となっていたことが窺える．また，実際に『三重の生について』の執筆によって，フィチーノが異端審問にかけられる寸前だったと，カスケとクラークは推測している[66]．

このような状況にもかかわらず，冒頭に引用したマージの言及によれば，ロレンツォは指輪の精霊を解放したとされている．たとえ噂話であったとしても，このような言及が残るということは，ロレンツォが未知なる力に少なからぬ関心を抱いていたことを示しているのかもしれない．

6.　著述家の言及とロレンツォの蒐集

それでは，ロレンツォの蒐集の中に，アルベルトゥス・マグヌスやフィチーノの言及と関連付けることが可能な彫玉があるのだろうか．

アルベルトゥスは『鉱物論』の中で，宝石に刻まれると力を発揮する，

二十種類以上の「像」の具体例を挙げている．以下はそのうちのひとつである．

> ヘラクレス座の像は，膝をついている男の姿で，一方の手にこん棒を持ってライオンを殺しており，もう一方の手にはその毛皮をもっている．そのため，もしヘラクレスの像が勝利に属する石に彫られており，また，持ち主がそれを戦場で身につけているならば，彼は勝者となるといわれている[67]．

これが，ネメアのライオンを退治するヘラクレスを意味していることは間違いないと思われる．メディチ家に関連づけられる彫玉のひとつで，これと同じ主題を表わしたものが，ナポリ考古学博物館に所蔵されている．それは，ヘラクレスがネメアのライオンを頭から抱え絞め殺そうとしている場面が表わされたカメオである（図6）．このカメオは教皇パウルス二世の財産目録に記載されるものであり，ロレンツォが多くの彫玉をパウルス二世から入手したことから，このカメオもロレンツォが所有していた可能性が指摘されている[68]．

メディチ家は，自らをヘラクレスになぞらえようとしていたことが知られ，メディチ邸の大広間には，ポッライウォーロ兄弟による，ヘラクレスの功業を表わした三枚のカンヴァス絵がかけられていた．そして，そのうちの一つは，このネメアのライオンを退治するヘラクレスであった[69]．メディチ家がヘラクレスのイメージを好んだ理由については，おもに政治的で道徳的な観点から説明されてきたが，あるいはより素朴な理由，すなわちアルベルトゥス・マグヌスが言及する，ヘラクレスの像に勝利をもたらす力があるとの魔術的信念も関係しているのかもしれない．

そもそも，メディチ家だけでなく，フィレンツェ共和国は十三世紀より伝統的にその印章に，ヘラクレスを刻んでいた．通常，やはり政治的かつ道徳的な意味において解釈されるその採用についても，アルベルトゥス・

図6　イタリアの彫玉家《ヘラクレスとメネアライオン》15世紀中頃？　瑪瑙・紅縞瑪瑙　ナポリ　国立考古学博物館

マグヌスの言及が関与している可能性がある．ヘラクレスは伝統的に，僭主を倒しフィレンツェに共和国制をもたらしたフィレンツェ市民の象徴とされてきたが，フィレンツェ共和国の印章の中には，アルベルトゥス・マグヌスが述べるような，ネメアのライオンを退治するヘラクレスも認められる[70]．すでに述べたとおり，沈み彫りを施した彫玉インタリオは，しば

しば印章として用いられており，石に刻まれたヘラクレスが，勝利をもたらすというアルベルトゥスの言及は，古くから知られていたに違いない．

アルベルトゥス・マグヌスが述べる，宝石に刻まれると効力を発揮する「像」と関連付けることが可能なメディチ家の彫玉は，他にもある．それはペガソスの像を表わしたものなのだが，まずは，アルベルトゥス・マグヌスがこのイメージについてどのように述べているか見てみよう．

> ペガサスが石に刻まれていると，兵士や戦場で騎乗で戦う者に幸運をもたらす．また，馬の病気にも効果がある．ペガサスの像は，有翼の馬の半身で表わされる．このような効力をもつので，『像の芸術』の中でペガサスはベレロフォーン，すなわち，戦いの泉の意の名で呼ばれている[71]．

1492年のロレンツォ財産目録には，まさにこのペガサスが刻まれた，以下の印章指輪が記載されている．

> ペガサスと五つの文字が刻まれたカーネリアン（紅玉髄）が嵌められた金の指輪　十五フィオリーニ[72]

このロレンツォの財産目録に記載されたこのペガサスの指輪を特定することはむずかしい．しかしながら，メディチ家と関連深い，ペガサスが刻まれた彫玉が二つ現存する．ひとつはフィレンツェ考古学博物館に所蔵される，古代に制作された縞瑪瑙のカメオであり，十七世紀のメディチ家の財産目録に記載される[73]．もうひとつは，十六世紀のメディチ家で所蔵されていた同時代の瑪瑙のカメオ（フィレンツェ銀器博物館）である[74]．メディチ家がこれらの彫玉を蒐集するにあたって，ペガソスの像が幸運をもたらすという，アルベルトゥス・マグヌスの言及が影響を及ぼした可能性は少なくないだろう．

ロレンツォの彫玉と直ちに関連づけられないものの，フィチーノも『三重の生について』の中で，古代の著述家の言及として，宝石に刻まれると効力を発揮する像を例挙している．例えば，長生きする為には，サファイアに土星（サトゥルヌス）の像を刻むと良いという．

> 長生きするために，古代の人々は，土星が上昇し良い配置の時刻に，フェイリゼック（Feyrizech）という石，すなわちサファイアに土星の像を刻んだという．土星の像とは次のようなものである．一人の老人が幾分高めの玉座，もしくはドラゴンに座している．彼の頭部は暗色の亜麻布で覆われている．両手を高くまであげ，手には鎌もしくは魚を握っており，暗色の長衣をまとっている[75]．

フィチーノの言及が彫玉の魔術を意味していたことは間違いない．なぜなら，これに大変良く似た言及が，宝石に刻まれると魔術的な力を発揮する星辰像が列挙されている，魔術書『ピカトリクス』の第二巻十章に認められるからである．実のところ，クラクフ，ヤゲロニア図書館に所蔵される十五世紀に制作された『ピカトリクス』の写本には，フィチーノの記述にあるような，鎌を手に持つサトゥルヌスが描かれている[76]．フィチーノ自身は異端の嫌疑をかけられるのを恐れたのか，『ピカトリクス』については一切触れていないが，多くの研究者が指摘するとおり，『三重の生について』はその多くを『ピカトリクス』に依拠している[77]．

アルベルトゥス・マグヌスの著作や『ピカトリクス』が，メディチ家周辺で知られていたことに鑑みると，彫玉蒐集の動機に，星辰から得られる神秘的な力の所有があったことは疑いないであろう．とりわけ，メディチ家周辺では，たとえば，サン・ロレンツォ聖堂内の旧聖具室の小部屋を覆う円天井に，フィレンツェの1442年7月4日のホロスコープを示しているとされる天球図が表わされていることに顕著なように，これらの像魔術

そのものの前提となる，天体の神秘的影響力についての学問，すなわち占星術が重要視されていた[78]．また，ポッジョ・ア・カイアーノのヴィッラ・メディチの建設は，ロレンツォの占星術的アドバイスをしていたフィチーノの助言により，好ましい星の配置が考慮された日時に開始されるなど[79]，『三重の生について』を著したフィチーノの言及に対して一定以上の信頼が寄せられていたことも，これを裏付けている．

実のところ，ロレンツォが石にも星辰の力が影響すると信じていたことを，以下のロレンツォの詩作『七つの惑星の歌』は示唆している．

> われらは七惑星なり．……／人に起こること，動物，草木そして石に起こること，すべてはわれらによって引き起こされる[80]

また，ヴァザーリは，長年失われていた彫玉の技術を，ロレンツォが復活させようとしていたと以下のように伝えている．

> 長年，［彫玉制作の技術］は失われていた．なぜなら，それに専念するものが誰もいなかったからである．…古代彫玉に大変な喜びを見いだしていたロレンツォ・イル・マニーフィコは，息子ピエロとともに古代彫玉を多量に蒐集した．…彼らの都市にこの芸術を導入するために，各地の名人を呼び寄せた[81]．

当時，彫玉には像を彫る行為を介して，星辰の力が込められていると信じられていたわけであるから，ロレンツォが意図したのは，彫玉というたんなる一技芸分野の復活ではなく，むしろ失われた魔術の復活だったのかもしれない．

7. 彫玉を表わしたメディチ邸中庭の円形浮彫

彫玉が像魔術と関連するものであったならば，メディチ家の彫玉の多く

が模刻された，ラルガ通りのパラッツォ・メディチ（現パラッツォ・メディチ・リッカルディ）の中庭のフリーズを飾るピエトラ・セレーナ（トスカーナ地方特産の砂岩の一種で，しばしば化粧材として用いられる）の円形浮彫は，どのように捉えられるだろうか．

マレスカは，古代より彫玉が魔術や星辰の印が刻まれた護符として用いられていたことから，この中庭の円形浮彫を，人間の神性を表わす寓意であるとともに，魔除けでもあったと推測している[82]．この円形浮彫はさまざまに解釈されており，いまだ意見の統一は見ておらず[83]，また，残念ながらアルベルトゥス・マグヌスやアルベルティ，フィチーノの著作に，中庭の円形浮彫に表わされた像と同じものを確認することもできない．しかしながら，どのように解釈されていたにせよ，円形浮彫を像が刻まれた石としてとらえるならば，少なくともフィチーノやロレンツォの周辺においては，魔術的な効果があるとみなされていた可能性は少なくない．

この円形浮彫は，八つのうち七つが彫玉をもとにしていると考えられている．七つのうちの六つの彫玉には，ロレンツォの銘が刻まれ，1492年の財産目録に記載されている．ただし，メディチ邸の完成が言及されているフィラレーテの『建築論』が著された1464年までに，メディチ家の所蔵であったのは，1456年の財産目録に記載される《ダイダロスとイカロス》のみであり，1465年の財産目録に記載される《アテナとポセイドン》および《サテュロスと幼児ディオニュソス》を加えても，三つである．また，メディチ邸完成時に《パッラディウムを奪うディオメデス》と《エロスの引く馭車の上のディオニュソスとサテュロス》は，いまだ教皇パウルス二世の所蔵であったことが確実であることから，いくつかの円形浮彫は，十五世紀に数多く出回っていたブロンズ製の複製をもとにしている可能性が指摘されている[84]．

とはいえ，いずれにせよ1492年には，円形浮彫のもとになった彫玉七つのうち六つがメディチ家に所蔵されていた．すなわち，メディチ邸完成時

には，円形浮彫としては再現されてはいたものの，メディチ家の所有ではなかった彫玉を，ロレンツォが生涯をかけて，一つひとつ蒐集に加えていったことになる．円形浮彫《ナクソス島のアリアドネ》は，ゴンザーガ家が所蔵していた彫玉をもとにしているという見解も示されている[85]．しかしながら，フランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿の没後，ロレンツォが枢機卿の彫玉の入手に腐心していたことから[86]，いずれにせよ，ロレンツォが円形浮彫のもとになった彫玉の全てを所有するつもりだった可能性は高い．

そしてその飽くなき蒐集欲は，ことによると，単に美的なものでも，経済的なものでもなかったのかもしれない．前述のとおり，宝石は，その硬さゆえに，像が刻まれると未知なる力が最も長く保持される媒体であった．そうであるとすれば当然，円形浮彫に用いられているピエトラ・セレーナよりも硬い宝石の方が，その力が長く保たれるはずである．それゆえロレンツォが円形浮彫のもととなった彫玉を執拗に蒐集しようとしたのは，より強力なその神秘の力を得るためだった，とも考えることもできるであろう．

8. 雷雨をしずめる精霊

メディチ家にまつわる宝石の薬効や像魔術としての彫玉についての考察を踏まえたうえで，今一度，冒頭に引用したマージが言及する，ロレンツォが嵐の際に指輪から解放したという精霊について考え直してみよう．

実際，彫玉の魔術への言及の中には，雷光や雷雨に関連するものがある．アルベルトゥス・マグヌスの『鉱物論』の石の印像に関する章のなかに，雷光や雷雨から身を護ることができる，以下のような彫玉が記されているのである．

> 右手に剣，左手にゴルゴンの首を持ったペルセウスの像は，雷光，雷雨や嫉妬による攻撃を免れさせるといわれている[87]．

このアルベルトゥスの言及とほぼ同じ構図の彫玉が，ナポリ考古学博物館に所蔵されている（図7）．ファルネーゼ家の所有であったことが判明しているが[88]，このような彫玉が，嵐の際に身につけられることもあったのかもしれない．しかしながら，雷光，雷雨から身を守るとされてはいるものの，それを追いやるとはされておらず，アルベルトゥス・マグヌスの記

図7　ディオスクリデス《メドゥーサの頭部をもつペルセウス》紅玉髄　ナポリ考古学博物館

述をロレンツォが解放した指輪の精霊と直ちに関連付けるのはむずかしい．なにより，アルベルトゥスは指輪と精霊については一切言及していない．

それでは，指輪の精霊とはいったいなにであろうか．

十二個の印章指輪の神秘の力が明らかにされるという，レオン・バッティスタ・アルベルティの寓話『指輪』に顕著なように，まず，指輪というもの自体が，当時，未知なる力と結び付けられていた．フィチーノも『三重の生について』の中で，自身は指輪よりも薬を好むと断りつつも，古代の著述家の言及として，金か銀の指輪に，星辰に対応する宝石と薬草を嵌め込み，それを身に着けると，星辰の力を得ることができると述べている[89]．周知のとおり指輪は，メディチ家の紋章として丸薬紋（パッレ）と共に好んで用いられ，スケッジャ（ジョヴァンニ・ディ・セル・ジョヴァンニ）によって描かれたロレンツォの誕生盆（デスコ・ダ・パルト）（ニューヨーク，メトロポリタン美術館）の裏面にも描かれているものである．メディチ家の象徴でもある指輪に精霊を住まわせ，難事のさいに当主のロレンツォがそれを解放する，というマージの記述は，明らかに，嵐をも操るマグス（魔術師）としてのロレンツォのイメージを，意図したものであろう．

精霊に関する言及の中で，当時もっとも影響を及ぼしたと思われるのは，中世をとおして知られていたヘルメス・トリスメギストスの『アスクレピオス』であろう．それは既述の，フィニグェッラの『図解年代記』の一枚〈ヘルメス・トリスメギストス〉（図5）にも表わされている，神々を創るという箇所である．ヘルメスによれば，エジプト人の祖先は神々を創り出す術を発見し，偶像を造りそこにダイモン（超自然的霊的存在）や天使の霊を召喚して招き入れた[90]．そして，そのダイモンや天使の霊は，石と薬草と香辛料からできているという．なぜなら，これらの素材となる物質はそれ自体が神性を持っているからなのだという[91]．フィチーノも『三重の生について』の中で，ヘルメスの言及を紹介しつつ，ほぼ同様のことを述べている[92]．フィチーノがロレンツォの祖父コジモの命によっ

て，ヘルメスの『ヘルメス選集』の翻訳をしていることを勘案すると[93]，ダイモンや天使の霊が石と薬草と香辛料からできている，というヘルメスの言及は，フィチーノにとって権威を持っていたに違いない．その他にも，ピコ・デッラ・ミランドラが所蔵していた『秘中の秘』では，印章指輪を身に着けて眠ると夢に精霊が現れるという記述がなされており[94]，アリストテレスがアレクサンドロス大王に秘密を教えるという形式をとるこの著作が，ある程度信じられていたとしても不思議はないだろう．

一方で，ロレンツォが解放したという精霊に最も近いと思われる記述は，魔術書『ピカトリクス』に認められる．この著作の第三巻の十章には，アリストテレスがアレクサンドロス大王に教えたとする四つの魔法の石の制作方法が記述され，そのうちの二番目の〈ヘレメティツ（*Helemetiz*）〉と呼ばれる魔法の石には，以下のとおり，雷雨や，雪や雹を追い払う力があるという．

> 汝がどこかで，雨や雪，雹や雷を見て，それを汝から，あるいは，汝のいる場所から遠ざけたいのなら，先に述べた言葉を唱え，この石を右手に持ち，天に向かってその手を挙げよ．さすれば，前述の全て［雨や雪，雹や雷］は静まるであろう．この石は霊的な力と精霊からできているのである[95]．

召喚魔術の儀式を思い起こさせる，この記述で注目に値するのは，この石が霊的な力と精霊によってできているという，マージの記述を想起させる言及である．この魔法の石〈ヘレメティツ〉は，石というよりも混合物といった類のもので，ヘレボルス（金鳳花科クリスマスローズ属の総称）や白石鹸草といった薬草類と，銀，鉛と赤銅鉱，粉砕した豚の足などを固め「精霊に作用させる」と出来上がるとされている[96]．

マージの言及する指輪の精霊が，上述のものだったかどうかを証明することはできない．この『ピカトリクス』の記述には，魔法の石を指輪には

め込むようにとは指示されていない．『ピカトリクス』には雷雨を追い払う魔法の石〈ヘレメティツ〉に病気を治す力もあったとは書いていない．しかしながら，少なくとも明らかなのは，『ピカトリクス』は死を覚悟したロレンツォが，病床に呼び寄せるようにとポリツィアーノに命じた，ピコ・デッラ・ミランドラが所蔵していた書である．また，前述のとおり，フィチーノがロレンツォに献呈した『三重の生について』は，その多くを『ピカトリクス』に依拠している[97]．これらを考慮すると，『ピカトリクス』の言及をロレンツォ自身も知っていたことは疑いを容れない．

ロレンツォが，精霊がいるという指輪を保持していたならば，こうした思考がルネサンスの文芸復興の精華ではあるものの，このような魔術的なものに頼らざるを得ないほど，ロレンツォの置かれていた状況が，緊迫していたことを表わしてもいるのだろう．なぜなら，晩年の1480年代には，ロレンツォは痛風に病んでいただけでなく，メディチ銀行ミラノ，ヴェネツィア，ロンドン，ブルージュ支店が閉店し，ローマやナポリといった主要支店も財政難に陥っており，本業である金融におけるメディチ帝国に暗雲が立ち込めていたことは明らかである[98]．

家業に翳りが見え，痛風に病んでいた1484年以降に，古代遺物蒐集が加速していることから，ロレンツォは彫玉をはじめとした蒐集に慰めを見出していたのだろう，とフスコは推測している[99]．もちろんそのような趣味的意図もあるだろうし，また，社会的地位の誇示や資産の拡大といった，近代以降におけるコレクションと同様の動機も含まれていたことは疑いない．しかし一方で，これまで考察してきたような，魔術的な効力をもつ神秘的な力という視点もまた，コレクションの主要な動機となっていたとは考えられないであろうか．とりわけ，その神秘の力が自身とメディチ家を助けるものと信じていたと考えるならば，晩年に加速するロレンツォの蒐集熱も，現実逃避どころかむしろ積極的打開策の試みとして，少なくとも当時の魔術的世界観のもとでは，ある種の合理的な行為として説明が

つくかもしれない.

おわりに

冒頭に挙げた嵐については，マージだけでなくポリツィアーノも記述を残している．ポリツィアーノによれば，落雷によってサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のランタンを飾る鍍金された球が破壊されたが，メディチ家の紋章を想起させる球の破壊に対して，まるでメディチ家にとっての災いを予兆しているようだったと述べている[100]．ポリツィアーノの予感どおり，嵐の三日後にロレンツォは没し，二年後にはメディチ家がフィレンツェから追放されてしまう.

ポリツィアーノはロレンツォの最期については詳述しているが，マージが述べる指輪の精霊については一切言及していない[101]．マージの言及は噂話に近いものであったのだろうし，実際にロレンツォが指輪の精霊を解放するという行動を取っていたとしても，ポリツィアーノが学問の成果を捧げる唯一の存在だったとして慕った，敬愛なるロレンツォに異端の疑いをかけられるような言及は避けたことだろう.

フィレンツェ商人ランドゥッチの日記によれば，ロレンツォ自身もこの嵐を不吉なものとしてとらえていたようだ．重病の床にいたロレンツォは，落雷がどこからどの側であったのかを尋ね，メディチ邸の方であったと聞いて，私もこれで終わりだ，と述べたという[102].

嵐の襲来や彗星の出現，奇形の誕生などの異常事態に，重要人物の死や凋落の予兆を見て取るのは，これもまた古代以来の卜占の長い伝統に基づくものの見方である．ポリツィアーノそしてロレンツォも，落雷にロレンツォ自身とメディチ家の命運を見ているのであり，十五世紀とはいまだこのよう迷信が社会に根付いていた時代であった.

そのような時代において，当時，権威として崇められていたヘルメス・トリスメギストスやアリストテレス，アルベルトゥス・マグヌスらの著作

にも言及されている，宝石や彫玉の薬効や未知なる力を，ロレンツォが晩年に最も情熱を傾けた古代彫玉の蒐集をとおして手中に収めたいと願ったとしても不思議はない，と言えるのではないだろうか.

注

1) エルンスト・H・ゴンブリッチ『規範と形式――ルネサンス美術研究――』岡田温司，水野千依訳，中央公論美術出版，1999 年，160 頁．なお，ゴンブリッチが言及する古代の宝石とは，古代彫玉と貴石製器杯のことである．［　］内は筆者による（以降同様）.

2) B. Masi, *Le ricordanze di Bartolomeo Masi calendario fiorentino dal 1478 al 1526*, ed. G. O. Corazzini, Firenze, 1906, pp. 16–17. 下線は筆者による（以降同様）.

3) 1492 年 5 月 18 日付，アンジェロ・ポリツィアーノからヤコポ・アンティクアーリへの書簡．A. Poliziano, *Letters: Volume 1, Books 1–4*, ed. and trans. S. Bulter, *The I Tatti Renaissance Library* 21, Cambridge, MA, 2006, p. 234.

4) ロレンツォの彫玉蒐集については以下を参照．N. Dacos, A. Giuliano and U. Pannuti, eds., *op. cit.*; L. Fusco and G. Corti, *Lorenzo De' Medici: Collector and Antiquarian*, Cambridge, 2006, pp. 6–10, 94–106, 123–129, 200–201; R. Gennaioli, "La collezione di gemme dei Medici nel XV secolo", R. Gennaioli, ed., *op. cit.*, pp. 22–27. 小佐野重利「ルネサンスにおける古代への憧憬―15 世紀メディチ家の古代彫玉コレクションをめぐって―」，『カメオ展　宝石彫刻の 2000 年―アレクサンダー大王からナポレオン 3 世まで―』（展覧会カタログ）2008 年，33～39 頁；西川しずか「十五世紀メディチ家の古代彫玉蒐集」，『美術コレクションを読む』遠山公一・金山弘昌編，慶應義塾大学出版会，2012 年，89～110 頁．石鍋真澄『フィレンツェの世紀』平凡社，2013 年，346～371 頁.

5) P. Cannata, "Pope Paul II, Humanist and Collector in Rome", *In the Light of Apollo*, Athens, 2003, pp. 230–231; R. Bagemihl, "The Trevisan collection" *The Burlington Magazine*, vol. 135, no. 1085, 1993, pp. 559–561.

6) D. S. Chambers, *A Renaissance Cardinal and his Worldly Goods: The Will and Inventory of Francesco Gonzaga (1444–1483)*, (Warburg Institute Surveys and Texts 20), London, 1992, p. 107.

7) C. M. Brown, L. Fusco and G. Corti, "Lorenzo de' Medici and the dispersal

of the antiquarian collections of Cardinal Francesco Gonzaga", *Arte Lombarda*, nuova serie, no. 90/91(3–4) (1989), p. 86.

8) M. Spallanzani, ed., *Libro d'inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico*, Firenze, 1992.

9) L. Fusco and G. Corti, *op. cit.*, pp. 6–10, 94–107.

10) M. Spallanzani, ed., *op. cit.*, pp. 36, c. 18v.

11) M. Spallanzani, ed., *op. cit.*, pp. 28, c. 14v.

12) A. C. Blume, "Botticelli and the Cost and Value of Altarpieces in Late Fifteenth-Century Florence", *The Art Market in Italy 15th–17th Centuries*, Florence, 2003, p. 152.

13) ルネサンスの魔術，占星術，神秘思想についての包括的な研究は，以下を参照．ウェイン・シューメイカー著『ルネサンスのオカルト学』田口清一訳，平凡社，1987年；D. P. ウォーカー著『ルネサンスの魔術思想』田口清一訳，筑摩書房，2004年；フランセス・イエイツ著『ジョルダーノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』，前野佳彦訳，工作舎，2010年；伊藤博明著『ルネサンスの神秘思想』講談社学術文庫，2012年．

14) 宝石に関する様々な著作については以下に詳しい．D. Wyckoff, in Albertus Magnus, *Mineralium*, ed. and trans. D. Wyckoff, as *Book of Minerals*, Oxford, 1967, Appendix B, Lapidaries, pp. 264–271; John M. Riddle, "Geology", *Medieval Latin: An Introduction and Bibliographical Guide*, eds. F. A. C. Mantello and A. G. Rigg, Washington, D.C., 1996, pp. 406–408; ジョージ・フレデリック・クンツ著『宝石と鉱物の文化誌』鏡リュウジ監訳，原書房，2011年．

15) Gaius Plinius Secundus, *Naturalis historia*, Liber XXXVII, trans. D. E. Eichholz, as *Pliny Natural History*, vol. X, book XXXVII, pp. 164–333.

16) Solinus, *Collectanea rerum memorabilium*, ed. T. Mommsen, 2nd. ed. Berlin, 1895 (r1958).

17) Isidorus Hispalensis, *Etymologiarum sive originum libri XX*, ed. W. M. Lindsay, 2 vols., Oxford, 1911 (r1985), bk. 16.

18) *Lamberti S. Audomari canonici Liber floridus: codex autographus Bibliothecae universitatis gandavensis,* ed. A. Derolez, Ghent, 1968.

19) Hildegardis Bingensis, *Physica* (*Liber simplicis medicinae*), *Patrologia Latina*, 222 vols., Paris, 1841–1864, vol. 197: 1117–1352

20) Alexander Neckam, *De naturis reum*, ed. T. Wright, Rolls Series (Rerum Britannicarum medii aevi scriptores): Chronicles and Memorials of Great

Britain and Ireland during the Middle Ages, vol. 34, London, 1863 (r1964), bk. 2: 48–98.

21) Bartholomaeus Anglicus, *De proprietatibus rerum*, Frandfurt 1601 (r1964), bk. 16.

22) Arnoldus Saxo, *De finibus rerum naturalium*, ed. E. Stange, 1905–07, bk. 3.

23) Vincentius Bellovacensis, *Speculum maius*, 4 vols., Douai 1624 (r1964–65), *Speculum naturale*, bk. 8.

24) Thomas Cantimpratensis, *Liber de natura rerum: editio princeps secundum codices manuscriptos*, ed. H. Boese, Berlin, New York, 1973, bk. 8.

25) Albertus Magnus, *Mineralium*, Liber II, Tractatus II, in ed. A. Borgnet, *B. Alberti Magni, Ratisbonensis episcopi, ordinis Prædicatorum, Opera omnia, ex editione lugdunensi religiose castigata...*, vol. V, Paris, 1890, pp. 1–103.

26) Theophrastus, *De lapidibus*, ed. D. E. Eichholz, Oxford, 1965.

27) J. M. Riddle, *op. cit.*, p. 406.

28) *Theophrastus on Stones: Introduction, Greek Text, English Translation, and Commentary*, eds. E. R. Caley and John F. C. Richards, Columbus, Ohio, 1956, pp. 22, 50.

29) *The Greek Herbal of Dioscorides*, John Goodyer, trans. (1655), ed. R. T. Gunther, Oxford, 1934 (r1996), pp. 623–660; ディオスコリデス著『ディスコリデスの薬物誌』鷲谷いづみ訳，小川鼎三他編集，エンタプライズ，1983年，783～824頁.

30) Pseudo-Aristotle, *De lapidibus*, in ed. V. Rose, "Aristoteles De lapidibus und Arnoldus Saxo", Zeitschriftfür deutsches Altertum und deutsche Literatur, 18, pp. 349–382, 384–397.

31) Damigeron, *De virtutibus lapidum*, ed. E. Abel, *Orphei Lithica*, Berlin, 1881 (r1971), pp. 161–195.

32) Avicenna, *De congelatione et conglutinatione lapidum*, ed. and trans. E. J. Holymyard and D. C. Mandeville, Paris, 1927 (r1982).

33) *Secretum Secretorum*, in Roger Bacon, *Opera hactenus inedita Pregeri Baconi*, ed. R. Steel, F. M. Delorrme, 1920.

34) *Picatrix: The Latin version of the Ghāyat Al-Hakīm*, ed. D. Pingree, *Studies of the Warburg Institute*, v. 39, 1986.

35) ヘルメス・トリスメギストスについては以下に詳しい．伊藤博明前掲書，182～198頁.

36) Hermes Trismegistus, *Asclepius*, ed. and trans., B. P. Copenhaver,

Hermatica, Cambridge University Press, 1992.

37) Hermes Trismegistus, *De quindecim stellis, quindecim lapidibus, puindecim herbis et quindecim imaginibus*, ed. Louis Delatte, in *Textes latins et vieux français relatifs aux Cyranides*, Liège and Paris, 1942.

38) 小林晶子著『マルボドゥス「石について」の解説とラテン詩全訳――11世紀末のキリスト教世界に登場した鉱石薬剤書の紹介』明治薬科大学研究紀要 人文科学・社会科学（20），1990，10～44頁.

39) Bēda Venerābilis, *Explanatio Apocalypsis*, *Patrologia Latina*, 222 vols., Paris, 1841–1864, 93: 129–206.

40) Gaius Plinius Secundus, *op. cit.*, pp. 164–333.

41) F. Ames-Lewis, *The Library and Manuscripts of Piero di Cosimo de' Medici*, New York and London, 1984, pp. 330–331.

42) M. Ficino, *De vita libri tres*, ed. and trans. C. V. Kaske and J. R. Clark, as *Three Books on Life*, Tempe, Arizona, 2002, pp. 276–277, 306–307, 437, 441.

43) 伊藤博明前掲書，182～198頁.

44) Hermes Trismegistus, *De quindecim stellis…*, *op. cit.*, p. 260.

45) Hermes Trismegistus, *Asclepius*, *op. cit.*, p. 90.

46) 伊藤博明前掲書，183～187頁.

47) P. Kibre, *The Library of Pico della Mirandola*, New York, 1966, pp. 95, 216, 251, 263, nos. 716, 984, 1091.

48) *Secretum Secretorum*, *op. cit.*, pp. 157–163, 252–257; *Picatrix, op.cit.*, pp. 64–73.

49) *Isidori Hispalensis Episcopi Etymologiarum Sive Originum Libri XX*, Tomus II, London, 1957, Liber XVI.

50) B. L. Ullman and P. A. Stadter, *The Public Library of Renaissance Florence: Niccolò Niccoli, Cosimo de' Medici and the library of San Marco*, Padova, 1972, p. 158, no. 281.

51) L. B. Alberti, "Anuli", *Intercenales*, trans. D. Marsh, as *Dinner Pieces*, *Medieval & Renaissance Texts & Studies*, vol. 45, *The Renaissance Society of America, Renaissance Texts Series*, vol. 9, Binghamton, New York, 1987, pp. 210–217.

52) Antonio Averlino detto il Filarete, *Trattato di architettura*, eds. A. M. Finoli and L. Grassi, introduction L. Grassi, *Classici italiani di scienze tecniche e arti*, Milano, 1972, pp. 73–78.

53) D. S. Chambers, *op. cit.*, Appendix 2, pp. 175, 178, 184, nos. 797, 804, 831, 892.

54) L. Fusco and G. Corti, *op. cit.*, p. 148.

55) 小林晶子前掲書，10 頁．以下本稿におけるこの詩からの引用はすべて同氏訳による．

56) このメドゥス（Medus）が現代の何石かは不明．小林晶子訳前掲書，33 頁．

57) アルベルトゥス・マグヌスはメディウス（Medius）と記述している．Albertus Magnus, A. Borgnet ed., *op. cit.*, p. 41.

58) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 154–155.

59) Albertus Magnus, A. Borgnet ed., *op. cit.*, p. 48. 下線は筆者による．なお訳出にあたって以下の和訳も参照した．アルベルトゥス・マグヌス著『鉱物論』沓掛俊夫訳，朝倉書店，2004 年，72 頁．

60) Albertus Magnus, *Mineralium*, ed. and trans. D. Wyckoff, *op. cit.*, p. 127.

61) Albertus Magnus, A. Borgnet ed., *op. cit.*, pp. 51–52. アルベルトゥス・マグヌス前掲書，76～77 頁．

62) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 322–323.

63) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 308–309.

64) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 316–317.

65) Albertus Magnus, *Mineralium*, ed. and trans. D. Wyckoff, *op. cit.*, p. 127.

66) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 395, 459.

67) Albertus Magnus, A. Borgnet ed., *op. cit.*, p. 54. アルベルトゥス・マグヌス前掲書，81 頁．なお以下も参照．Albertus Magnus, *Mineralium*, ed. and trans. D. Wyckoff, *op. cit.*, p. 124

68) N. Dacos, A. Giuliano and U. Pannuti, eds., *op. cit.*, p. 81, cat. 62.

69) メディチ家とヘラクレス神話に関しては以下に詳しい．A. Wright, “The Myth of Hercules”, *Lorenzo il Magnifico e il Suo Mondo*, ed., G. C. Garfagnini, Firenze, 1994, pp. 323–339.

70) ヘラクレスが刻まれたフィレンツェ共和国政府の印章については以下を参照．L. Passerini, “Il sigillo fiorentino con l’Ercole”, *Periodico di Numismatica e Sfragistica*, 1, 1868, pp. 276–285.

71) Albertus Magnus, A. Borgnet ed., *op. cit.*, p. 54. アルベルトゥス・マグヌス前掲書，80～81 頁；ワイコフは『像の芸術』は天文学者のニムロドの著作であるかもしれないと推測している．また，ベレロフォーンは馬の名ではなく，ペガソスを手懐けた英雄のことだと指摘している．D. Wyckoff, in Albertus Magnus, *Mineralium*, ed. and trans. D. Wyckoff, *op. cit.*, pp. 141–142.

72) *Libro d’inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico*, *op. cit.*, p. 40, c. 21.

73) A. Giuliano, *I cammei della Collezione Medicea del Museo Archeologico di Firenze*, Roma, 1989, p. 288, n. 261.

74) R. Gennaioli, ed., *Le gemme dei Medici al Museo degli Argenti*, Firenze, 2007, p. 343, n. 450.

75) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 334–337.

76) *The Picatrix, op. cit.,* p. 68, pl. 3.

77) D. P. ウォーカー前掲書，47頁；Kaske and Clark in M. Ficino, *op. cit.*, pp. 45–47.

78) 伊藤博明前掲書，271頁.

79) J. Cox-Rearick, *Dynasty and Destiny in Medici Art: Pontormo, Leo X and the Two Cosimos*, Princeton, 1984, p. 160

80) Lorenzo de' Medici, *Canzona de' sette pianeti*, ed. A. Simioni, *Opere*, II, Bari, 1939, p. 251.

81) G. Vasari, *Le vite de'più eccellenti pittori scultori ed architettori scritte da Giorgio Vasari, pittore aretino*, ed. G. Milanesi, Firenze, 1906, vol. 6, pp. 367–370.

82) P. Maresca, *Alchimia, magia e astrologia nella Firenze dei Medici*, Firenze, 2012, pp. 41–43.

83) U. Wester and E. Simon, "Die Reliefmedaillons im Hofe des Palazzo Medici zu Florenz. I. Teil. Die Tondi, ihre Vorbilder und die Meisterfrage", *Jahrbuch der Berliner Museen*, 7. Bd., H. 1, 1965, pp. 49–91.

84) N. Dacos, A. Giuliano and U. Pannuti, eds., *op. cit.*, pp. 40, 42–43, 146–147.

85) Toby Yuen, "Giulio Romano, Giovanni da Udine and Raphael: Some Influences from the Minor Arts of Antiquity", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 42, 1979, pp. 269;

86) L. Fusco and G. Corti, *op. cit.*, pp. 14–15.

87) Albertus Magnus, A. Borgnet ed., *op. cit.,* p. 55. アルベルトゥス・マグヌス前掲書，75～76頁.

88) C. Gasparri, ed., *Le gemme farnese*, Napoli, 2006, p. 145, n. 262. ロレンツォの彫玉蒐集は，1537年にアレッサンドロ・メディチが暗殺された際に，その妻マルゲリータが遺産相続したが，マルゲリータがオッターヴィオ・ファルネーゼと再婚したため，ファルネーゼ家の所有となった．そのため，この彫玉がロレンツォの蒐集であった可能性も否定できない.

89) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 278–279.

90) Hermes Trismegistus, *Asclepius*, *op. cit.*, p. 90; 伊藤博明前掲書，186～187

頁.

91) Hermes Trismegistus, *Asclepius*, *op. cit.*, p. 90.

92) M. Ficino, *op. cit.*, pp. 388–389.

93) 伊藤博明前掲書，91 頁.

94) *Secretum Secretorum*, *op. cit.*, pp. 257–259.

95) *The Picatrix, op.cit.,* p. 147.

96) ibid.

97) D.P. ウォーカー前掲書，47 頁；Kaske and Clark in M. Ficino, *op. cit.*, pp. 45–47.

98) R. de Roover, *The Rise and Decline of the Medici Bank, 1397–1494*, London, 1963, pp. 71–72.

99) L. Fusco and G. Corti, *op. cit.*, pp. 149–150.

100) A. Poliziano, *op. cit.,* pp. 246, 248.

101) A. Poliziano, *op. cit.,* pp. 226–241.

102) ルカ・ランドゥッチ著『ランドゥッチの日記――ルネサンス一商人の覚え書』中森義宗，安保大有訳，近藤出版社，1988 年，68 頁.